

6. 検査説明から考える 安全・安心なMRI検査

土井 司 高清水高井病院

安全・安心なMRI検査とは、被検者に障害やストレスを与えることなく検査を終えることである。「安全」は、操作者をはじめ、医療スタッフがMRI検査にかかわるリスク（転倒・転落、吸引、発熱、神経刺激、騒音、造影剤による副反応など）を万全の対策でもって排除すれば低減が可能であるが、「安心」は医療者側と被検者とのかかわりの中で当事者が感じる感情なので、検査前の説明とコミュニケーションの在り方が被検者の心情を左右する。

本稿では、検査前の説明をどのように展開すれば、被検者に安心を与え、ストレスを最小限に抑えることができるかを考える。

被検者の不安

被検者は、一般的に何らかの疾患や悩みを持った方々である。病院に来られる時には何らかの覚悟を持って来られる半面、病院に来れば疾患や悩みが解消されると期待されている方も多い。まして、MRI検査は疾患の原因をより明確にできるものであって、治療を施す装置ではない。そのため、被検者は「どのような理由でMRI検査を受けた方がいいのか」、また「MRI検査にはほかの検査にはないどのような利点があるのか」、逆に「MRI検査にはどのようなリスクがあるのか」などを知りたいと思うのが普通である。

昨今、MRI検査は多くの市民が知るところであるが、その特異性や危険性まで浸透しているとは思えない。当日の診

察でMRI検査を受けることになって放射線科を訪れた被検者に、「MRI検査ですか?」と尋ねると、「医師に『MRI検査を受けて来てください』と言われたから」という返答を聞くことがある。検査を受ける理由や効果について、よく知らされずに放射線科に来られているのである。そのような状況であっても、多くの被検者はことを荒立てることもなく自己納得されているように見受けられる。診療科の医師にとってMRI検査は、造影剤とペースメーカーに注意を払っておけば、被検者に与えるリスクは低く、一般的なX線撮影と同じような認識なのかもしれない。

最初が肝心

MRI検査担当者が最も困るのは、検査直前になって当該者がMRI検査の非適応者であることが判明することである。当該者にとっても、「会社を休んで来たのに」「忙しいのに時間が無駄になった」「交通費はどうしてくれるの」との抗議は当然である。まず依頼医が、当該者にMRI検査が必要だと判断した時に、MRI検査の必要性と検査内容の説明とともに、当該者がMRI検査に適應しているかどうかのチェックは必須である。チェック項目は、①体内に心臓ペースメーカーなど電子機器がある、②手術などの経験があり体内に金属がある、③人工内耳もしくは義眼をしている、④磁石で固定されたインプラント（磁性アタッチメント）がある、⑤閉所恐怖症または狭いところが苦手である、⑥大きな音に耐

えられない、⑦30分程度の静止ができない、⑧妊娠中もしくは妊娠の可能性がある、などである。条件付きでMRI検査が可能な機器もあるので、それを専門家に相談するシステムを構築しておけば、第一関門は大丈夫である。外部施設からMRI検査の依頼を受ける場合も、診療連携室（地域連携室）の係員に上記のチェックを周知しておけばよい。

初めてMRI検査を受ける人が経験するのは、①大きな機械と閉ざされた空間、②狭いガントリー、③コイルの装着と身体の拘束、④大きな機械音、⑤発汗や熱感、⑥ピリピリと感じる神経刺激、⑦静止時間の長さ、などである。「こんなに狭い所は耐えられない」「じっとしてられない」は、検査が中止となる時の被検者の主張であり、「こんなに大きな音がするとは聞いていなかった」「暑かった」などの検査終了後のクレームは、大問題に発展することもある。このような事態を防ぐためにも、事前の検査説明は重要である。

被検者のMRI検査 に対する認識

図1は、2022年11月～2023年3月に、MRI検査のために当院放射線科に来られた被検者558人に、①MRI検査を受けるのは何回目ですか？②MRI検査はどのような検査かご存じですか？③MRI検査は金属を付けていると危険であることを知っていますか？④MRI検査はやけどの危険性があることを知っていますか？